

## 編集を終えて

(一)

本書は、史料集めの初めから出版に至るまでに、十年の長い年月がかかったが、富山県の置県百年の記念事業の一つに取りあげられたのは、甚だ意義の深いことである。

富山売薬業は、江戸中期から今日まで、全国の各地に広く行商して、国民の保健維持に役立ってきた。しかし藩政期の経済事情からいえば、彼らの行商は、旅先の諸藩にとつては輸入の増加になり、貿易まさつを起こしたが、旅先の情報を巧みに把握し、旅先藩および消費者の利益を大切にすることによって、経営を続けることができた。また地場産業として、富山県その後の産業発展の中核をなしてきて、伝統産業の代表的役割を果たしてきた。

ところが、この産業については、未だ全般的な基本的史料の収集がなされていないこと、また近年はこの種の史料

が急速に散逸しつつあるので、組織的に史料編さんが行なわれることは、学界や実業界からも大きく期待されることろであった。

実は富山売薬業については、既に「富山売薬業史史料集」がある。高岡高等商業学校の創立十周年記念事業として、昭和十年に出版された。同校の上原専祿教授を中心に東京商大の大学院生の増田四郎氏、そして後には同校に着任した城宝正治教授も加わって、編さんされた。上原、増田両氏は、その後は共に一ツ橋大学学長に、城宝氏は富大教授に就任になった。このように立派な研究者たちによって、編さんされた。しかし史料は、主として、富山の町から集められ、また江戸時代が中心であって、せいぜい明治十年ごろで終わっていた。

(二)

本書は、幕末から明治、大正、昭和にわたって史料を集めるが、その史料文献は富山の町は勿論、県内の諸地域から広く探索することにした。高岡、新湊、滑川、上市また

農村地帯などの比較的に売薬の活発な地域の史料を求めた。さらにその行商先は全国各地に及んでいて、なお輸出にも手を広めている。このために史料を集めるには、県内部のみでなく、外部からも集めることが、必然的に要請せられる。本書の編さんには、この見地から史料の収集は積極的に広範囲に行なわれることになった。

この例として売薬行商人たちが、旅先道中の安全を祈願して寄贈した石灯籠や石鳥居が諸地方にあるが、讃岐の金刀比羅宮や小倉（北九州市）の篠崎八幡神社、また岐阜県内の大井神社灯籠などについて写真を集めてきた。これらには、「越中国富山売薬人中」、「越中国富山住薬種屋権七」、「富山県売薬同業者」の文字が刻まれている（本書では小倉の灯籠の写真のみを掲載した）。

また県外では、多数の薬の史料を収蔵している岐阜県内のエーダイ株式会社の内藤記念くすり博物館からも相当数の史料を利用させていただいた。

しかし既に知られた史料即ち前記の「売薬業史史料集」や富山県史の近世、近代、現代などの各篇にのった史料の

中でも、必要と思われる少数のものは掲載することにした。これには、原史料に当たれるものは、これを照合してみても正確を期した。

本書の多くの史料は、こうして新たに広く収集されたものである。古い記録や文献を所蔵している家を探して集め、また県内や石川県内の図書館などの蔵書の中からも集めた。当然ながら官報や富山の県報、市町村史誌や地方新聞、業界紙はもちろん県統計書類や薬事の法規類などからも集めるように努めた。こうして草の根を分けるようにして精力的に史料が集められた。

### (三)

十年の長い年月をかけたのは、この目立たない史料収集に相当の時間を費したからである。史料集めとして、富山県立図書館をはじめ、富山や戦災にあっていない高岡の市立図書館など、広く各地の図書館や郷土博物館、郷土史料館などに取材を試みた。東京の国立国会図書館にも出かけた。「まえがき」の中に、鹿児島や北海道の若干の市町村

史誌の記事を載せたのは、ここでの収集が多い、しかし別に数年前に鹿児島大学付属図書館で、これを集め、なお昨年秋には鹿児島県立図書館にも問い合わせて集めたものもある。全国的な文献の探索は、ようやく緒についたともいえる。

とくに図書文献の中では、現存する新聞類に目を通すことにして、県内発行の明治中期からの地方新聞や業界紙について、一枚一枚を読み、その中からも集めたりした。富山商工会議所では、「富山商業月報」が大正期を中心にして、そろって保存されているのを知った。貴重な史料が数多く含まれているのに、どうしたわけか、これまで全く知られず、利用もされないままに、商工会議所に奥深く保存されていたわけである。これも今回の成果であった。

なお史料収集の作業中に、予想以上に多くの史料が得られたのは、海外売薬のことであった。元来、江戸時代の売薬商人が領域を越えて他国に行商したのは、一種の海外進出であったともいえる。明治期では富山県民は開拓のはじめから北海道に多く移住していき、明治末頃は年々全国移

民数の第一位をしめたのに通ずるものがある。こうした積極性から輸出売薬も盛んに行なわれた。中国や台湾、シベリア、東南アジアのみでなく、ハワイ、メキシコにも販路をもったのである。台湾、韓国などには行商したこともあるが、多くは売薬の輸出であった。それで海外売薬の項を新たに設けて、これの関連文書を集めた。

こうして九〇〇〇枚に及ぶデータや文献が集められた。次はそれを目次にあるような項目に仕訳して、整理分類した。全史料はこの項目に一応は納めた。数個の項目にまたがるものは、その主なものと思われるところに入れた。それらは、平均三〇〇枚を集めて一冊に綴った。これが合わせて三十冊になった。これをさらに本書に納められるように選別して大体五分の一に縮めたが、これには県内の高校の六人の先生たちの援助をいただいた。

今一つの本書の特徴は、統計が相当に多く作成され、最後部に並べてあることである。基本的には、明治十七年からの毎年の「富山県統計書」の中から、売薬業に関連する項目をとりだして、時系列的にタテに並べて現在に至るま

での数値を整理して掲載した。しかし統計表の基準が年により異なっていて、これを一貫して処理するには苦勞が重ねられた。これは薬業振興課の高岡氏の努力によるものである。また文献や史料の中から統計処理できるものは、表におきかえて表現することも根氣よく試みられた。行商人の地域的分布状況や経営規模について、また納税額などからも、このような表現によって、簡明に富山売薬業の具體的な姿とその時代的推移を知ることができるようにした。

#### (四)

この史料集の編さん、出版の地道な息の長い事業は、実は、その由来は、十数年前に県の薬業振興課で、筆者が前記のような必要性をお話したことが、きっかけとなったようである。やがて県の事業として取りあげられて、前進することになったのは、有難いことであった。

思えば、京大経済学部で、昭和十四年に木庄栄治郎先生のゼミに卒業論文をかいたときの題目が、「富山売薬業の研究」であった。すぐにこの論文を学界誌の「経済史研

究」に載せていただき、また経済学部の創立四十周年記念の行事には、先生たちの著書の展示室のコーナーに学生卒業論文として、これを飾っていただいた。遂にそれからこの方面の研究に進むことになった。やがて阪大の宮本又次先生の御指導をうけた。この長い私の研究歴の一つの節目として、十年間も富山売薬業の史料集の編さんに携わらせていただいたことは、この上もない喜びであり、感謝にたえない。

この数年間は、編さんの作業が追い込みの段階に入ってきたが、長いあいだ、常に薬業振興課から特別の御援助をいただいた。ことに、土肥前課長、黒瀬現課長や担当の鹿熊氏、高岡氏、調査員の道正氏をはじめ課内の皆さんの御労苦は大変なものであった。また富大の小松和生助教からも献身的な御援助があった。さらに薬業経営について、奈良県の田村薬品工業の田村信一社長からも御援助をうけた。とりわけ、この間、ときに中井精一先生から貴重な御指示をいただいたことは、感謝にたえない。

なお集められた史料は、本書にのらなかった数多くの史料をも含めて、三十冊が、そのまま同じく置泉百年記念事業として設置せられ、昭和五十七年十一月一日に開館した富山県薬業資料館（富山県民会館金岡分館）に保管されることになった。

この資料館は、富山売薬業の原料や製造器具等を陳列するが、これと共に、文献資料を収集展示し、学習室をもつところに特色があると思われる。ことにそれについて、富山売薬商人の巧みな商業経営上の意味を理解するのに役立つ参考文献として、ジャック・サバリーの「完全な商人」のフランス語版とドイツ語版もここに保存された。

また富山売薬商人のその全般的な広い範囲の行商と国際比較されるものとして、開拓期のアメリカのヤンキー行商人の基本史料がある。共に遠隔地まで勇敢に行商、運搬した。その規模は、零細経営で非持続的な組織であり、ハーバード大学のグラースはこれを「小資本主義」の経営と概

念（グラース著、拙訳「ビジネスと資本主義—経営史序説」）づけた。この商家文書は、筆者が文部省の在外研究で、ハーバード大学ビジネススクールに行ったとき、ジョンソン教授の指導の下に、ニューイングランドのボストンやウォスター、フィラデルフィア、ニューヨークなどで、現存する行商関係の帳簿や伝票などをゼロックスにとつて持ち帰ったものである。中には売薬も含まれている。親方行商人のノイズ家の帳簿など二三〇〇枚余りがある。これもこの薬業資料館に保存されることになった。この世界の主な二つの行商が比較研究されることが期待される。

昭和五十七年十二月二十二日

編集責任者

植村元覚